

ほらここに“ムーブ”の10年 生きている

# MOVing



vol.42

ムービング

2005年9月21日発行(季刊誌)

北九州市立男女共同参画センター

ムーブ"情報誌

特集

## ムーブ開所10周年記念 ムーブフェスタ2005 事業報告

### CONTENTS

#### ●誌上講座

第3回「理工系女性をふやすために：真の男女共同参画社会を目指して」

橋本 ヒロ子（十文字学園女子大学社会情報学部長）

#### ●「メディアを読み解く－ジェンダー・メディア・ウォッチ」パンフレットのお知らせ

#### ●(財)アジア女性交流・研究フォーラムからのお知らせ

#### ●男女共同参画推進部からのお知らせ

#### ●“レディスモ！”“レディスやはた”からのお知らせ



# 「人と人とのつながりから、未来が見える」

\* 7月16日(土)13:00~16:00

時代と共に変わりつつある家庭や地域での「絆」をテーマに、各分野で活躍されている4人の方々をお招きしてパネルディスカッションを行いました。現状や課題、そしてこれから期待される連携のあり方について語っていただきました。

## パネリスト:

**山根基世** (NHKアナウンス室長)  
「日本各地で見た地域・家庭の絆  
これからの新たな連携」

**宮城晴美** (那覇市歴史資料室主査)  
「沖縄で見た地域・家庭の絆  
女性の果たした役割」

**マリ・クリスティーヌ**  
(異文化コミュニケーター・  
国連ハビタット親善大使)  
「世界各地で見る現在のコミュニ  
ティ・家庭の絆」

**岡本広治**  
(NPO法人北九州国際自然大学校理事長・  
企救丘校区自治連合会事務局長)  
「北九州市で見る地域の連携・絆」

**コーディネーター:**  
**羽瀬川順子**  
(北九州市立男女共同参画センター  
“ムーブ”所長)



## ●「絆」の現状と課題

**山根:** 私は旅番組を長い間担当し、日本各地の様々な人々の暮らしを見てきました。崩壊していく家族も随分見る一方、やっぱり家族はすばらしいという例もたくさん見ました。ただ、家族のあり方としては、同居することや血縁、戸籍でつながるといふかたちは崩れつつあると思っています。地域のあり方として印象深かったのは、沖縄県の与那国島です。与那国には外から来た家族が多く、その中のある男性は、8年も住み続けた後、ようやく家を建てようとしているにも関わらず、自分は「半土着種」だと語りました。与那国には、どうしても土着させてくれない風土があると。しかし、それも居心地のよさに繋がっているようなのです。従来からそこに住んでいる人たちは、温かくて血の濃い情熱のようなもので結ばれ、昔からのしきたりに縛られて生活している。外から住み着いた人は、その枠の外にいるから楽に住めるという構図です。私は、これからは従来の村落共同体とは違う、お互いの個を尊重しながら新しいかたちの共同体が作れたらいいのではと感じています。



山根基世 さん

**宮城:** 沖縄の社会は共同体意識が強く、親族間には「門中制度」という、男系血族で固めた男性優位の組織がありますが、それにまつわる種々の行事や、制度を維持する役割は、女性たちが担っています。そういう沖縄で1985年、女と男のネットワークをテーマに、「うないフェスティバル」が行われました。「うない」とは、沖縄

の古語で「女きょうだい」という意味です。ちょうど「国連女性の十年」最終年で、ナイロビの世界女性会議の熱い思いを沖縄でも、という提案があったんですね。放送局のディレクターを中心に私も含め、職種の違う女性6人で事務局をつくり呼びかけました。参加の条件として、お互いの主義・主張に干渉しない、「この指と〜まれ」方式です。第1回から講演会やワークショップ、舞台など様々な発表で1日中盛り上がってきました。今年は21回を迎え、参加団体も70余りにまで増えました。男社会の沖縄で、緩やかながら女性たちの連帯の輪も広がり、メンバーの中から市議や県議、地域のリーダーも誕生しています。

**マリ:** 私は、父の仕事の関係で、子どもの頃に海外のいろいろな国で生活しました。先週は学校の同窓会でタイに行ってきました。宗教や文化や体制も違う国から多くの人が集まり、価値観も違うはずなのに、みんな話している内容はよく似ており、離婚や義理の家族との関係など、みんな人間関係に苦労している。日本だけではないんですね。私はやはり、大事なことは家庭でのコミュニケーションだと思います。日本の美点は、人の気持ちを察することだと思っていますが、この「察する」文化は、木と紙で作られた家の中で培われました。襖を隔てて聞こえてくる音や気配から人の行動や気持ちを知ることができたのです。でも、日本の家は西洋化され、部屋に壁ができて、家族のコミュニケーションにも壁ができてしまった。外国の家では、子どもに責任能力ができるまで親は部屋に鍵をかけさせてはくれないんです。ところが、日本ではそういうことは伝わらずに、子どもに鍵をかける許可も与え、その結果、「察する」という能力は低下し、家族の絆も弱くなってしまったのです。

**岡本:** 私はちょうど北九州市誕生の年に生まれ、ずっとここに住



んでいます。NPO法人北九州国際自然大学の活動内容は、人の夢を実現させることです。初めての活動は、ある重度の障害を持つお子さんの、ヘリコプターに乗りたいという夢を叶えることでした。計画は、空港での焼肉パーティ、音楽演奏と広がり、会社や空港と交渉しながら成功することができました。一人の子どもの夢に対して多くの大人たちがモチベートされると、こんなことができるのかと実体験で学びました。何かをやろうとしたとき、前例がないからとか、大変だからとあきらめずに、こうしたらいいのではという前向きな姿勢、それから「お互いさま」という気持ち持ちが大切。私は、小倉南区の自治会の事務局長もしておりますが、そこで感じることは、縦の連携はしっかりしているけれど、今は非常に短くなっているということです。高齢者から幼稚園生までという、もっと長く縦の連携作りをしなくてはと。そして、横の連携作りは、コーディネート役の使命と僕は感じています。

## ●コミュニケーションのあり方について

**山根:** 仕事をする上で学んだことの一つは、自分の言葉を持たなければ自分の思いを遂げることができないということです。日々、自分が感じたこと、考えたことを自分の言葉として蓄えていくことが大事。これは多分家庭でも同じことだと思います。



マリ・クリスティーヌ さん

**マリ:** あるアメリカの育児書に、「自分でできないことに直面した時に、そのことを自覚して、できる大人に頼むことができるのが、頭のいい子」とありました。日本のお母さんは子どもが気づく前から何でもしてあげていて、コミュニケーション能力を育てることができないようです。じっと我慢して待つことが必要です。

**岡本:** 地域の中でもコミュニケーションが薄くなっていると感じます。親は、子どもには人と協力し合える人間になってほしいと思っているのに、自分は大変だからと活動に参加しようとしません。そんな現状があります。新しい試みとして、これからはメールでつながるということもできるのではと考えています。

## ●男女共同参画社会の視点から

**羽瀬川:** 「男女共同参画社会基本法」(平成11年6月23日施行)では、男女が共に家族としての役割を果たしながら、仕事も学習も地域活動もできるようにしていくことを謳っています。しかし、現実はまだまだという状況です。

**宮城:** やはり家庭の中で食事が一番大事だと思います。おいしい食事を食べながら頭にきたという人はいませんよね。食事の時の家族の会話は欠かせないと思いますし、その関係が社会でのコミュニケーションにつながっていくと私の体験から思っています。

**山根:** 私は経験から、夫婦の



宮城晴美 さん

関係もやっぱり言わなければ分からないと思っています。毎日の暮らしの中で、「私の愛せるあなたでいてください。」と、言葉で働きかけていくことが、絆を深め、男も女も対等な人生を生きていけるのではないのでしょうか。

**マリ:** 日本には、家族を優先するというのがもっと必要です。九州には男尊女卑が残っているらしいですが、それは表に対する建前であって、家の中ではきちんと奥さんを対等に思うことがすごく大事なことでと思います。



岡本広治 さん

**岡本:** PTA活動は女性が多かったのですが、最近は「おやじの会」などの活動もありますし、地域では順番制ですが自分たちの年代にも町内会長が回ってきます。やはり今後は性別で役割を決めず、お互いを理解した上での認め合いが必要と考えます。

## ●親を見ること、介護について(会場からの質問を受けて)

**山根:** 両親とは離れて暮らしていますが、私自身は介護保険制度に感謝しています。それぞれの親子関係があり、置かれた状況も違うでしょう。百人百様の介護のあり方がこれからはあり得るのではと思います。

**マリ:** デンマークでは、夫婦のどちらかが倒れた場合、家で介護させないんです。夫婦の関係が介護する側とされる側が変わることで、崩れてしまう。介護は国でするから、外で働いて税金を払ってくださいと。日本で重要なのは、まず人の目を気にせず、最善の方法を相談しあった上で選ぶことだと思います。

## ●新たな絆づくりを目指して

**岡本:** 既存の組織の枠を超えて地域の施設を使いながら、人が集まって憩いの場となるようなものを作っていくべき。他の団体の活動も応援したいと思っています。

**マリ:** 家族のかたちや男女の役割というものにおいても多様性を受け入れることが大切だと思います。

**宮城:** 活動の輪を広げていくには、チェーンのように一人がまた別の新しい人を呼び込んでというように、参加している人が次へつなげていこうという意識をもつことが必要です。

**山根:** 家庭の機能をどれだけ社会で分担していけるかということが今後の大きなテーマでは。富山県五箇山の雪踏み当番から浮かんだイメージですが、自分の時代の新雪は次の世代のためにも自分で踏んでおきたいものです。

**羽瀬川:** 新しい絆づくりに明るい展望が見えてきました。家庭や地域の新しいつながりによって、男女が共に、より魅力ある地域づくりをしていくことがやっぱり大切なことだと思います。